

特42

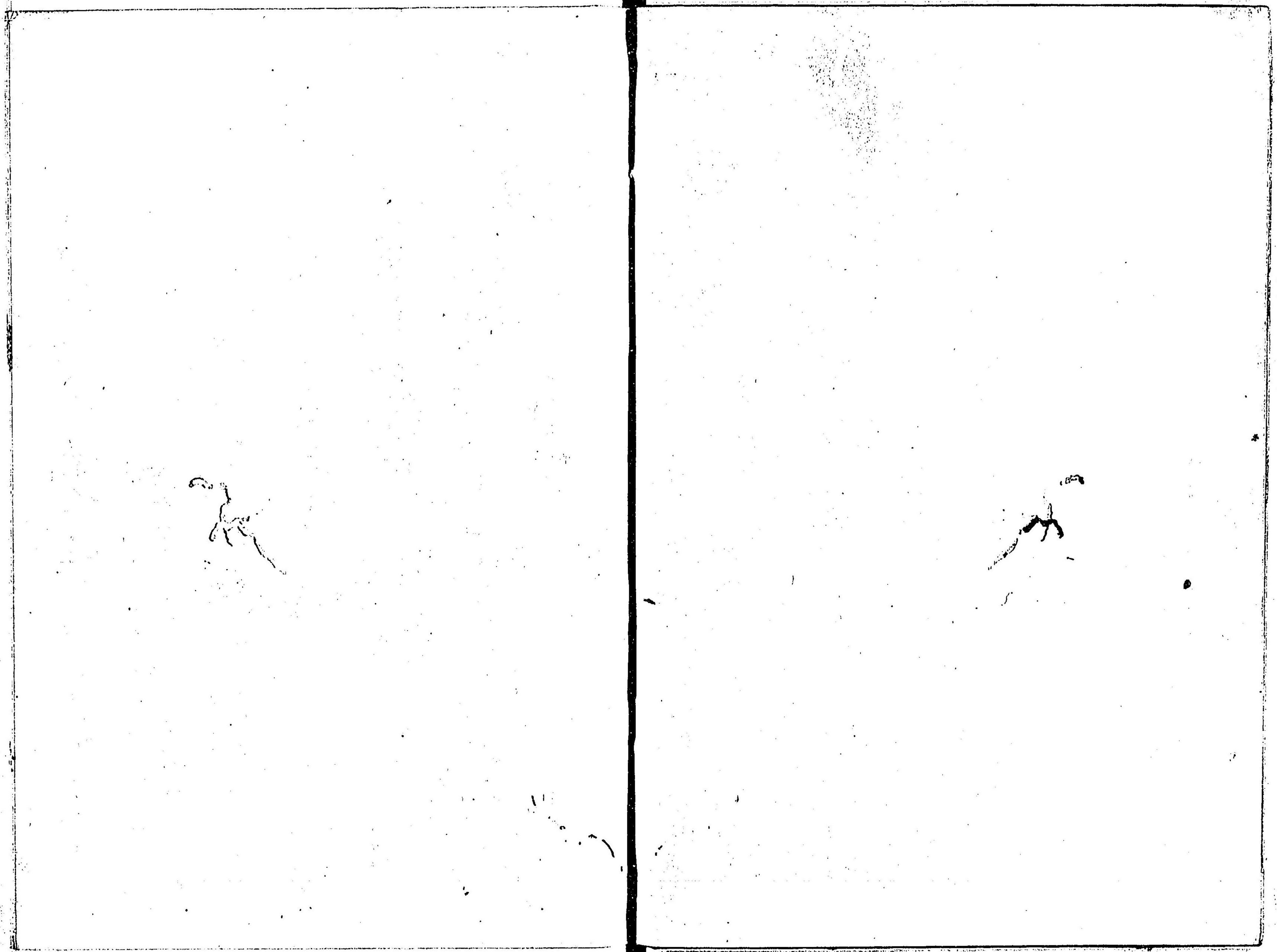
442

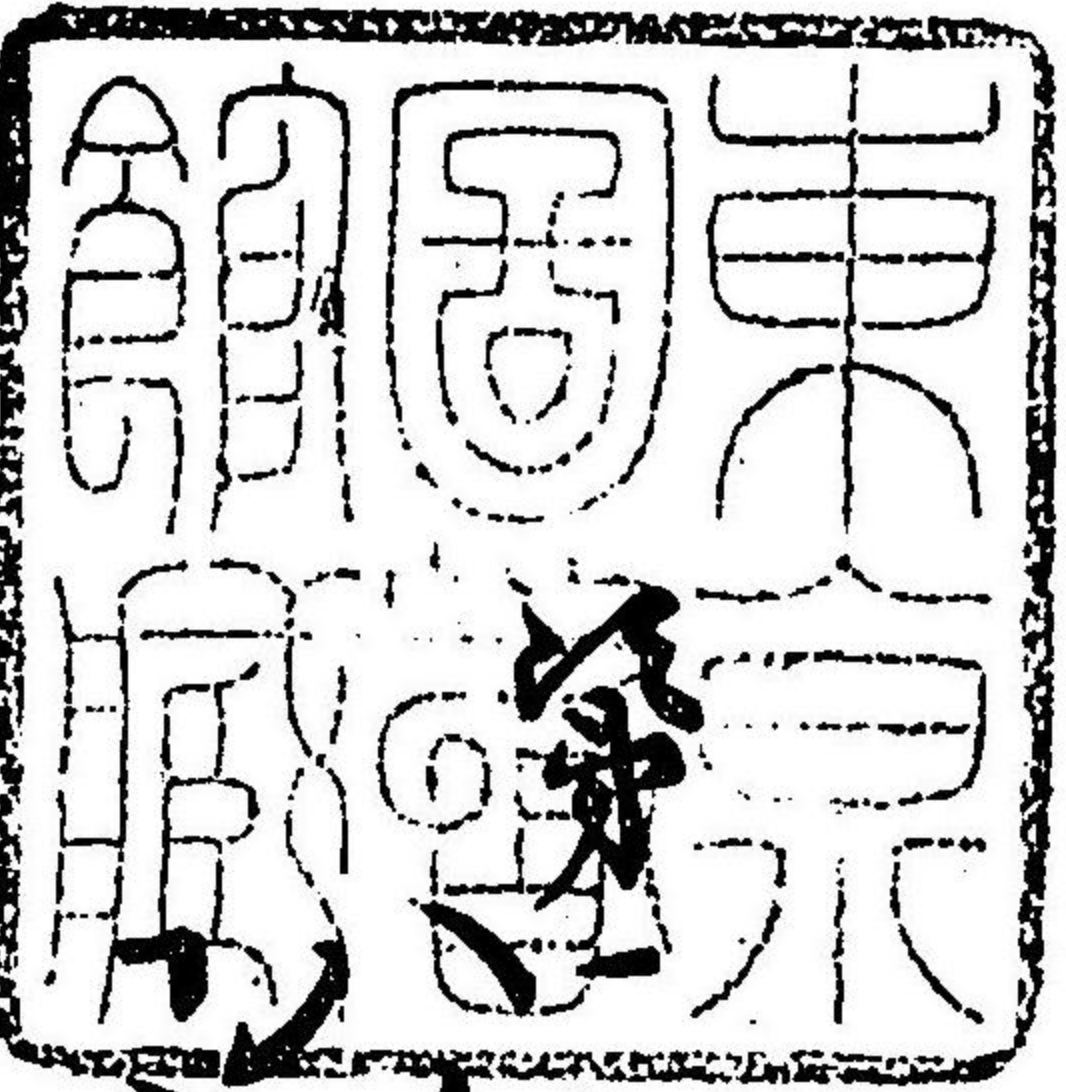
冰室
善界
芭蕉
百萬
舟糸夢

十六

東 京 圖 書 館

二 三 冊	二 號	四 七 架	函	音 樂 類	和 書 門
-------------	--------	-------------	---	-------------	-------------





水室

鴻毛行あり君のくみかき

孝義園に 甲信 有昇の壺山院

仕たむる屋下也我此度母夜園

九世の戸よまの院下向道あり

是より中若狭路より津田の入

江普塔後世の山ととも一見し

何れもまじりて氷は融る水音
 下平 なる御代の花調の道もすく破し
 上平 國去ゆのち又家のかき年一の山し
 中平 由かづのちまたらあぢいなる山
 下平 深みなるく書し動もなるあづ
 此谷降りるもいもくもなる山

一 行つめあき霜の翁の年々氷室
 一 吹く心身もあづく ちあひ足

あは若人の事あはの事乃作

あは若人の事あはの事乃作

あは若人の事あはの事乃作

氷室ちよもの 梅も年々花

あのおは供治るもあはの事乃作

高
乃仁徳天皇の清寧天皇と和國の

乃氷室よりぞあるそあり氷乃

おありおありまま其後の隆の隆も

あられもはえつるをたよりの

松まつ亭てい山やま隆たかも氷室あり

又此國よあると隆言も

きく風を電も電傳つたあり

とく信しんも事こと長ながの氷こは供た

乃為母及國ははの郡ぐんの氷室こ

はありありありあり

山やまもありあり隆たかの白しろも

ぬる言ことありありありも雪ゆき氷こ

清きよありありありあり

氷の清ありありあり君の殿あり

晴... 目きりまひくまして... 法輪...
 病きり... 陽徳... たり...
 ... 雨露... の...
 ... 夏乃目よ... まで...
 ... 夢... 夢...
 ... 萬... 有... 君の...
 ... 都乃... 山...
 ... 入...

... 紫山の枝...
 ... 水... 雲... 氷室...
 ... 大... 敷...
 ... 身... 浮世...
 ... 御調... 天照...
 ... 氷... た...
 ... 教...

蓋よりしよんえんく火の三時
 一切の魔軍を焚焼せり
 外より多量の相とまきまきしり
 内は慈悲の法惠察を不動の理を顯
 但主の心の中より有種の
 悲願の心を輪肉の
 道とまかして魔境をこり口は歎

思ひきくまも物ありて去まきしり
 同よしり具の法は具は縁の切
 より三聖道と出あうし尚て冤畜の
 牙をあらわしんくは敵法敵とあわ
 ちりてあうしと歎くしる未
 成りくまもあうしとあうし
 此とえては三時火を焼きしり

善界
 上善界
 諸善事
 邪法を断りて
 一如して允を不二あり。自性清淨
 天竺より来りて不動と名付る
 聽我法者得大智慧了じたりと云也
 其時其聲の志くはるも如く
 月王ありて人の心に入る能く多

伽十二天を以て降魔の力を合して
 後天へおとすまゝに吹く月よ東
 西よ松尾水野や賀茂の山を流し
 吹く人ももはるはる行つたも
 地よ打ちちりてはるはる八嶋

乃良のさばりて
 来りてはさくし
 佛力非力人より
 子色つるる
 善宮よのり
 ちる

芭蕉

是の唐土甲裁國乙のさくしと

中可よの者まの僧さくし
 法華持經の事おれの日
 中經を讀まの事
 もありの月より
 あゝ愛の事

中よしあはれとて又信者にあはれ
 ぶれく讀經の打書は室のあはれ
 よ人のせしあはれ園のいとあはれ
 てらうのあはれあはれあはれあはれ
 思ひ作サレ 既サレ夕陽西よつらば
 けうの陰冷ナリ 一と身の色は
 あはれか 夕ナリさつあはれあはれ

色く月よなまへく陰のあはれ
 まくとあはれあはれあはれあはれ
下 誦ナリまへくナリ 芭蕉は松乃
下 色ナリくあはれあはれあはれあはれ
サレ 内ナリさつあはれあはれあはれあはれ
 うたへさつあはれあはれあはれあはれ
 うちあはれあはれあはれあはれあはれ

下等
 美あはれ
 錦少も
 の枝も露も
 錦少も
 の枝も露も
 錦少も
 の枝も露も

讀誦の色
 白の女
 秋も
 女
 見
 者
 女
 見

此のよ破ヤきたまりタめなるニ行ユのノさ
 ぶサらラぬニ月ツキのノ影カゲもモさサまマ
 やヤらラらラらラ 蘭ラン省シヨウのノ花ハナのノ時トキ錦キン帳チヤウ
 のノもモなナらラきキんンのノ雨アメのノ衣イ草クサ店テン乃ノ
 由ユりリ思オモはハぬヌ 何ナニもモ清スガ志シ深フカくク
 出デ経キョウ讀ドク誦ソクのノ程ハジメ内ウチへヘ入イりリ入イりリ内ウチへヘ
 手テのノひヒへヘあアらラうウ方カタ籠カゴやヤ此ココはハ経キョウとト聴キくク

トトもモ我ワもモくクまマのノ女メ非ヒ精セイ草クサ末マツの
 たくタクひヒ道ミチもモ頼タノシもモうウ社シャ々々 乃ノうウらラぶブ
 生ナ聴キ聞ク人ヒトおオいイたタくク念ネン随ズイ養ヤウのノ信シンもモあアれ
 しシ切キれレ非ヒ精セイ草クサ末マツのノたタくクもモ何ナニ
 のノさサらラぬヌのノまマ 押オシめメ更マシらラるル籠カゴもモ押オシ
 ちチくク草クサ末マツ成ナ佛ブツ乃ノいイたタくクをヲ推オシしシ
 志シのノうウらラぶブ 藥ヤク苦ク瑜ユ尔ニあアらラせセれてテ

草亦因去方精非精も皆これ諸
 法空相乃女 三枝の骨を 答乃
 水音 信のさあゆ寺ありき
 乃心せある折るよ上り 燈を背
 きくま月くきくもよ嫌
 さあゆふよるゆきまの人の
 多思のりる

あり火事を出る道あきも
 柳ハ年より花ハくわあめこき事も
 唯まきくの色香のあはも多成佛の
 國去るゆはの國去る人上ウサ
 扱もさるる女ハあはれ計
 法乃とりら白きくくくあはれ
 中よ付疑ひる角ハまきの國路

女

其清き雷を仰あやまり行かぬ

あつあつねかき 女 おも草女も雨

さくらさくら 女 しらた女くみし敷あつ

秋 女 くらあつ 女 精非精 女 くら

うら 女 たい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

あつ 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

よ色蕉の女の衣をうしろ色の花うめ

あつぬ 女 油 女 ほ 女 う 女 ひ 女 も 女 せい 女 せい

支非精 女 女 女 な 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

乃 女 精 女 一 女 塵 女 法 女 界 女 の 女 地 女 の 女 う 女 へ 女 よ 女 雨 女 露

霜 女 せい 女 の 女 さ 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

乃 女 花 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

一 女 花 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

日影 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい 女 せい

下女

色音いろねをあらわすます諸は互相あらわぬも

あらわぬもあらわぬも ヤクあらわぬもあらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

あらわぬもあらわぬも あらわぬも あらわぬも

つらなる山ありきと月さる侍美し
 初下ぬ学下杖下の角下乃下音下起下し下き下ま下ふ
 藤原下のよ下お下の下ま下ま下し下神下さ下る下
 ち下ち下く下さ下ん下こ下の下さ下り下も下さ下る下人下
 若下さ下こ下ほ下り下の下衣下さ下も下の下さ下る下女下
 霜下の下さ下し下露下の下さ下る下も下さ下る下
 草下の下枝下も下久下か下み下く下あ下ま下り下じ下女下

乃上羽上衣上あ上れ上ち上 是上も上さ上き上跡上乃上だ
 う上と上く上さ上る上る上 此上の上た上も上も上芭上
 蕉上乃上あ上ま上の上角上さ上る上く上も上さ上る上也
 寺上乃上庭上素上あ上ま上の上あ上ま上り上な上る上
 か上ら上も上た上も上さ上き上さ上る上る上露上の上ま上よ上お上
 ち上ら上松上乃上う上を上吹上さ上る上く上花上も上子上
 花上も上さ上る上く上よ上花上も上さ上る上く上ら上も上さ上る上よ上

あはれ芭蕉の歌のまじり
下
蕉
十一尾

百萬

改
竹馬よらるる道下三下乃女

と尋甲是は和の三芳野の者

多くは是は渡の松のあまの今南都

西大寺のあはれまては日るひやては此

比の徳の大会にまゝはるは此のま

人よはるる人念佛のまゝはるはる

三女行

あつちの乃合の拍子もあつち

とささるる南を河津段佛

南を河津段佛南を河津段佛

南を河津段佛南を河津段佛

あつちの目あつちの雲もあつち

ゆくゆくあつちのあつちのあつち

頼まらるるあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

あつちのあつちのあつちのあつち

子 子
打美... 安... 守... 給...
子
何...

子
母... 中... 毎...
甲
...

女
...

世に人の心は神に似て居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し

神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し
神の心は人の心と通じて居るが如し

故郷もあゝ世々も行くれ程もや
 半羊徑衡よかむり鳥雀枝の深きよ
 ありまらむ世中かゝる浪乃よるる
 行くも水の牙の果いらふあらしあり
 梢の露の古錦よ整月をひらき
 ありまらむ世中かゝる浪乃よるる
 きのし東のたつらつ然しとちあふ
 ありまらむ世中かゝる浪乃よるる

受れあつてもあまの成景く下女比目の
 松志ま波の目系まらふカもぞうらうら
 ちや大長坂乃ごめてかゝりあつた
 かくもも信人の赤まの跡の浪も抽れ
 ちやうし陰あつた思のまの年あま
 下 雲流く月の散行く西乃大寺の
 柳陰みりり子乃ゆゑ白露のたま

新...
 かしら...
 三...
 月日...

乃...
 乃...
 乃...
 乃...

世に於ては、彼洲本なきはも、
 氣まじきもの父あまの母もあまの
 物よは乃ちうらうらる程に、
 三門の車路も、
 山よ

船毎慶

今白思り、
 と定めを、
 傍よ住居も、
 扱も我君判官殿へ頼朝乃御代友
 少して平家とてほ、
 常乃は中日月の

傍よ住居も、
 扱も我君判官殿へ頼朝乃御代友
 少して平家とてほ、
 常乃は中日月の

びひうひあひ者の謔言よより中
 たうれいり。なとも口惜ひひ言ま
 てい。親きを我親兄の礼をたそ
 せし。終日まる如き。用事ありてあ
 國の方。津下向あり。後身よあやまり
 ぬ。海より。款を。多し。為よ。今。あひて
 め。後より。は。船。よ。乗。り。津。乃。國。居。り。停。

大物の浦へと忍作 サシ 文治の初
 めつ。頼自義經不き。乃由。既。落
 死。力。あ。判。友。都。と。ま。さ。の。道
 せう。あ。ら。ぬ。其。は。ら。ま。よ。西。國。の。方。と
 三。一。五。九。河。ま。あ。深。く。も。雲。井。の。月
 出。も。惜。ひ。教。の。名。跡。さ。ら。坊。平。家
 傳。母。の。都。出。よ。り。入。て。唯。十。余。人

為りあはれどもはるかに思ふ

もくもく信哉くはるかに思ふ

頼ても頼る人の心あるは

行なわね 御清を事とさ

あるては信ま 司つるは信下君

はた大下よ成らる留まらる

とくもかきくはるかに有る所要

きく 徳とむは事とるは事とる

蔵殿のはるかに思ふはるかに

しより直に事とるは事とる

やも角もさく受らはるかに

やとるはるかに事とるは事とる

度思ひも落人と成るはるかに

思ふはるかに事とるは事とる

元一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、中、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

まいりて借ま令の君より二度降之
 とう思行を志 判 ありし年慶詩
 子簡すあふ 半 妾てんさるは是
 花門出の行末を代りて菊の盃詩
 又社ましくあまれ 半 量る君の詩
 きが方 半 ちよもてて涙よ
 き計あり 半 ちよもてて涙よ

河の橋の毎路の門出入和子 半
 一 半 其時勢 半
 時の調子を 半 渡只の部 半
 風 半 波頭 半 瀟 半
 日 半 豊 半 急 半 人 半
 立 半 ち 半 ち 半 ち 半
 も 半 傳 半 陶 半 朱 半 公 半 句 半 詩 半

洗へ下地 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

うが原乃下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

の富上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

日上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

急上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

君上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

頼光上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

是上 頼光下 頼光上 頼光下 頼光上 頼光下

アヤカシ
武蔵殿此は母よりある

判
皆ぞ頼るる母よりある

上カ
事なきは母よりある

西國までして一年家の一に

恨
事なきは母よりある

判
事なきは母よりある

判
今更なるは母よりある

上
あはれなるは母よりある

道のみつるは母よりある

天命よきは母よりある

始めたるは母よりある

まじりてみたるは母よりある

母天皇九代のはれ平の知威出雲

判
あはれなるは母よりある

浦^上の^地色^下を^上あ^下ま^上の^下く

信^上國^下の^上況^下其^上あり^下様^上の^下又^上義^下經^上

も^上海^下の^上志^下の^上か^下ん^上の^下浪^上の^下深^上の^下長^上

刀^上の^下勢^上の^下波^上の^下攻^上め^下る^上を^下松^上

湖^上を^下き^上て^下雲^上の^下吹^上き^下眼^上を^下く^上

心^上も^下あ^上り^下て^上計^下の^上な^下ら^上ず^下の^上計^下

あり^上其^下時^上義^下經^上の^下も^上ら^下ず^上の^下く

ら^上お^下援^上お^下す^上の^下人^上の^下あ^上ら^下ず^上

言^上さ^下り^上た^下る^上の^下給^上の^下年^上の^下慶^上

隔^上て^下ら^上る^下物^上の^下あ^上ら^下ず^上の^下校^上

殊^上に^下く^上と^下押^上さ^下し^上て^下東^上方^下降^上の^下南^上

方^上軍^下の^上利^下が^上又^下西^上方^下の^上威^下徳^上が^下方^上の^下全^上

夜^上又^下明^上王^下中^上史^下大^上の^下動^上明^下王^上の^下さ^上

く^上よ^下ら^上ず^下の^上行^下の^上乃^下の^上も^下要^上具^下の^上以^下

て^上の^下事^上の^下乃^上の^下も^上要^下具^上の^下以^上

